

祇園を祇園と書くのは誤字か
— 浮世絵アーカイブを資料とした検証 —
ABOUT THE TRADITION OF THE NOTATION AT GION

The research by the Digital-Archive

當山日出夫
TOUYAMA Hideo

花園大学文学部(非常勤講師) 631-0072 奈良市二名 6-1492 htoym@ken.ne.jp
Hanazono-University 8-1, Nishonokyou Tsubonouchi-chou, Nakagyou-ku, Kyoto

あらまし：京都の祇園の表記には、様々なバリエーションがある。「しめすへん」を「ネ」で書くか「示」で書くか。また、その右隣の「氏」の下部に「一」を付加する（祇）、などである。本稿では、右隣の字体について、「一」を付加する、あるいは、「てん」を右肩に付加するなどの字体が、近世期からの伝統的な表記をうけつづものであることを、検証する。そのための資料としては、立命館大学アートリサーチセンターのデジタル・アーカイブ（浮世絵・名所図絵）を利用する。そして、この作業を通じてあきらかになった、デジタル・アーカイブのメタデータ付与の問題点について述べる。メタデータは、研究者の多様な研究目的に対応できる柔軟性をもつものでなければならない。

Summary : The notation at GION in Kyoto has various kinds. The form of " SHIMESUHEN " of the Kanji in the left side and the form in the right have a wide range of typefaces. The notation at Gion in the present Kyoto clarifies to inherit a tradition from the Edo period in Japan. As the material, we use the DIGITAL ARCHIVE in the ART RESEARCH CENTER in Ritsumeikan University. The METADATA in the DIGITAL ARCHIVE must correspond to the various research purposes.

キーワード：祇園 表記 デジタル・アーカイブ メタデータ

Keywords : GION NOTATION DIGITAL-ARCHIVE METADATA

【1】はじめに

本シンポジウムの昨年度(第11回:『国文学と非文字資料』)において、赤間亮氏(立命館大学)が『古典芸能研究におけるデジタルアーカイブの効用』と題して講演をなさった。この赤間氏の講演の主旨は、立命館大学アートリサーチセンターにおける、主として、浮世絵画像アーカイブの構築・運用(特に、メタデータの付加)についてのものであった(注1)。

一方、筆者は、昨年、京都における「祇園」の表記の実態調査をおこなっている。これは、主に、非文献資料による文字研究の領域へのこころみである。基本は、現存して、今現在、通常に街

頭で目にするのできる資料を対象としている。これは、文字使用の実態調査の報告であると同時に、文字(字体・書体・表記法)の地理的分布から、その変遷をたどる、一種の歴史学的な側面もあわせもっている。(注2)

現存する現在の事物・事象、特にその地理的分布から、歴史を考えるとというのは、学問分野でいえば、言語地理学・日本民俗学などにおける、方法論である。この発想を文字史に適用した場合、当然、過去からの文献資料について、比較検討・検証の必要が生じる。

このような研究を通じて得た知見の一部として、本稿では、以下のことを述べるものである。

- (1).現時点における非文献資料における祇園の表記の様相が、江戸期の文献資料(浮世絵・名所図絵)などにおいても確認できることを述べる。現代の文字の実態についての、歴史的資料からの検証である。
- (2).祇園についていえば、「祇園」の表記は、必ずしも、誤字とはいえず、歴史的な標準・慣用であることが判明する。これは、「文字の正しさ」とは何であるかについて、再考をうながすものである。
- (3).祇園の地名は、京都の他にも、福岡市(博多)や広島市にも存在する。これらの現地調査の結果と比較した場合、伝統的な祇園信仰の裏づけがある博多の祇園は、京都に近い様相を示している。しかし、広島の場合は、祇園信仰の伝承がなく、また、戦後あたらしく復興した街であることもあってか、きわめて辞書的規範に忠実である。
- (4).本研究では、京都の祇園についての歴史的資料としては、立命館大学アトリサーチセンター(以下、本稿においては、「立命館 ARC」と略称する)で構築・公開の、デジタル・アーカイブ閲覧機能によって一般に見ることができるものを使用する。そのため、本稿のような研究課題においては、デジタル・アーカイブのメタデータ付与が、きわめて貴重である。
- (5).メタデータ付与は、多様な研究者の多様な研究目的に対応できるものでなければならない。そのためには、より細分化されたものではなく、逆に、より概括的・包括的なものであることが望ましい。

【2】非文献資料と文字研究

従来、文字研究は、文献資料を中心に行われてきた。簡単にいえば、紙・木簡に手書きで書かれたもの(写本)、あるいは印刷されたもの(活字・木版など)であった。また、そのうえに、昨今の課題である、コンピュータで使用する文字の問題(Unicode、JIS 漢字=JIS X 0213:2004 など)が、議論の対象となっている。

筆者は、これらの文献資料ではなく、非文献資料という一群の文字資料の存在に着目している。非文献資料とは、一般的には、街頭で人々が目する、バス停・道路標識・駅名・店舗の看板などで

ある。これらは紙に書かれた文字ではない(多くは、プラスチック・木・鉄板など)、また、図書館・博物館などに保存されるものでもない。しかし、現実には、人々が、実際の生活において、行動のよりどころとなっているのは、この種の文字である。

これら非文献資料の利用は、以前のフィルムカメラの時代では、かなり困難であったことである。現在、フィルムカメラに変わるものとしてのデジタルカメラの普及と、その画像データのコンピュータでの管理・整理によって、研究資料として利用できるようになったものである。さらに現在では、画像の Exif 情報への GPS 情報(撮影の位置情報=緯度経度)を、付加することも容易になっている。(注3)

【3】現在の京都の祇園の表記の問題点

結果的に、京都における祇園の表記については、筆者は次のような結論を現段階では得ている。論点は次の二つである。

第一には、「しめすへん」を「ネ」で書くか「示」で書くか、である。

第二には、「氏」をどう書くか。「氏」の下に「一」を付加する、あるいは、右肩に「てん」を付加するか、である。辞書的な規範としては、下に「一」を付加する「祇」と「祇」は別の漢字である。また、右肩に「てん」を付加する字は、基本的には通行の小型漢字字典には掲載されていない文字である。

以上の、論点を整理すると以下ようになる。

「しめすへん」については、

- (1).京都の祇園における基本的な表記は、「しめすへん=ネ」である。
- (2).「祇(ネ)」は、伝統的な花街の風情を残す地域に顕著に観察される。
- (3).祇園地区にあっても、現代的な繁華街としての地域では、「祇(示)」や「GION」などの雑多な表記が見られる。
- (4).「祇(ネ)」の字体は、非文献資料のみならず、京都ローカルな文献資料でも確認できる。
- (5).「祇(ネ)」と「祇(示)」の違いは、文字使用の位相差であると同時に、地理的分布として、観察できる事象である。

右隣の「氏」については、

- (1)「しめすへん」の如何にかかわらず、基本的には、「氏」である(正しい表記)。
- (2)しかしながら、辞書の規範からすれば誤字であるはずの「祇」が、意外な程に多く見いだせる。ただし、位相的・地理的分布を確認できるほどには、多くの事例があるわけではない。しかし、少なからぬ「祇」の例が存在することは確かである。(これが、単なる誤字であるのか否かの検証が、本稿の主な主題とするところである)。

【4】漢和辞典などの「祇・祇」の記載

通常の漢和辞典を見れば、「祇」と「祇」は、本来はそれぞれ別の漢字である旨の注記が、必ずある。一般的な漢和辞典の代表として、『新字源』(角川書店)(図1)の記載を要約する。(注4)

「祇」: 音は「ギ」または「シ」。「くにつかみ」の訓があり、「神祇」など用例がある。あるいは、助字として「ただ・まさに」と訓ずる。

「祇」: 音は「シ」。訓は「つつしむ」あるいは、助字として「まさに」ともちいる。

辞典によって程度の差こそあれ(「別字」とするか、「通用する字」とするか)、本来は、別の漢字である。そうであるならば、「祇園」を「祇園」と表記することは、誤字ということになる。

また、この両字は、『JIS 漢字字典』(注5)でも、基本的には区別されている。しかし、文字の使用に記述的立場(漢和辞典のように規範的ではなく)をとる『JIS 漢字字典』の掲載の用例をみると、「祇」と「祇」は、様々に混同して使用されていることがわかる。(図2)

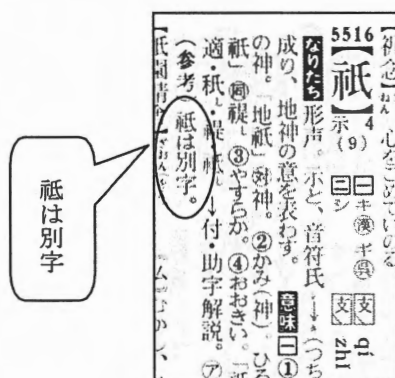


図1(新字源)

祇	祇
示113-5 1-67-13 632D E3AD E24C 7957	示113-4 1-21-32 3540 B5C0 8B5F 7947
人名 ヲカミ 祇山(カミヤマ・姓)、ギ園(ギオン・姓)、スミ 祇子(スミコ)、タダ 祇生(タダオ)、マサ 祇重(マサヨシ)、ヨシ 祇温(ヨシハル) 地名 ガミ 田祇(タギ・愛知)、ギ 祇園(ギオン・愛知)	人名 ヤスシ ヲキ 吉祇(ヨシキ・姓)、ギ園(ギオン・姓)、シ 孝祇(タカシ)、ズミ 祇男(ズミオ)、タダ 祇樹(タダキ)、マサ 祇重(マサヨシ)、ヤス 祇彦(ヤスヒコ) 地名 ギ 祇園町(ギオンチヨウ・佐賀)、ズミ 山祇町(ヤマズミチヨウ・長崎)

図2(JIS 漢字字典)

まず、以下のことを確認しておく。「祇」についての、一般的な辞書の規範字体としては、「しめすへん」は「示」が本来の字体、「ネ」が拡張新字体(83JIS 漢字体)、右隣の「氏」、これが基本である。そして、「祇」と「祇」は別字とする。

なお、ワープロでの仮名漢字変換では、ATOKでもMS-IMEでも、「ぎおん」から変換すると「祇園」「祇園」の2種類の変換候補が出るようになっている。これは、実際の使用例を反映しての変換辞書になっているためであろう。

【5】「しめすへん」の具体例

これについては、既にいくつかの学会・論文などで述べたことである。しかし、確認のため、現在において最も典型的と思われる、祇園の表記事例をしめす。(図3)



図3(祇園の実例)

【6】「祇」と「祇」（右隣の「氏」の字体）

次に、「祇」の右隣に着目して、その概要を述べる。以下、本稿の立場としては、「祇」の右隣については、「祇園」が正しい表記であり、「祇園」は誤表記である、という一般的前提のもとに、考察をすすめることにする。（しかし、結果としては、「祇園」は誤表記というよりも、一種の慣用的な表記法として定着しているものと、筆者は考える。）

【7】現在の「祇園」の事例

筆者が見いだした、「祇園」の事例をいくつか以下にしめす。これは、非文献資料に限定する。なお、観光ガイドや地図類においても、かなりの事例を見つけることはできるのだが、これらの場合は、ワープロによる〈誤変換〉の例と見なして、とりあえず、考察の対象からはずすことにする。



図 4(祇園の実例)

また、基本的には、「祇」「祇園」のみを示す。文字から、その使用箇所などが特定できないように、あえて、このような処置をとる。これは、「祇園」の事例が、店舗名など、かなり個人的なものに多く見られるからである。ただし、公的・公共的なものについては、その限りではない。左上は交番の地名表示である。（図4）（注6）

以上のような事例が、実際に京都の祇園地区を歩けば、容易に観察される。その気になって探せば、すぐに見つかる、と言ってもよいほどである。辞書の規範からすれば、あきらかに誤字である。しかし、単に現在の用例数が多いことのみでは、誤字とも慣用的用字法とも、判断しかねる。

【8】立命館 ARC デジタルアーカイブ

立命館大学アトリサーチセンター(ARC)については、昨年度の『人文科学とデータベース』シンポジウムにおいて、実質的にその構築と運営にたずさわっておいで赤間亮氏より、解説の講演があったことは、前述のとおりである。

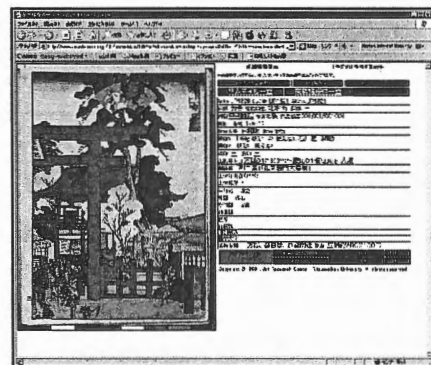
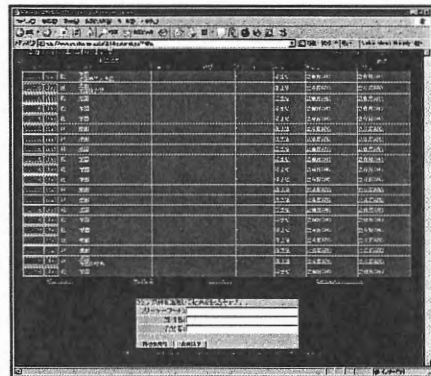


図 5(立命館 ARC)

赤間氏の発表は、主として、絵画史・芸能史の資料としてあつかうことを目的としたものであった。一方、筆者、これを文字史研究の資料として見ることになる。ここでは、本稿の利用目的の範囲内において、そのデジタル・アーカイブについて、概略を述べる。これは、あくまでも、公開されているデジタル・アーカイブについての、利用者(筆者)としての見解である。

立命館 ARC は様々な活動を行っているが、そのなかに、デジタル・アーカイブがある。「ARC 公開データベース」としては、例えば、「歌舞伎関連データベース」「浮世絵関係 WEB サイト検索システム」などがある。今回、筆者が、「祇園」の調査に利用したのは、「書物と絵画プロジェクト/京都名所図絵閲覧システム」である。(図5)(注7)

【9】江戸時代の祇園の表記

立命館 ARC「書物と絵画プロジェクト/京都名所図絵閲覧システム」で「祇園」で検索をかけた結果として得られた画像データ(江戸時代の版本画像)をディスプレイで見て、実際にはどう書かれているかを整理したのが、本稿の末尾に掲げた「立命館 ARC 祇園表記調査」である。(ただし、「八坂神社」で検索すると、得られる画像データの結果は異なるが、「祇園」の表記の様相については、基本的に同じである。)

一覧すればすぐに分かるように、「祇園」を現在のごとく正しく「祇(氏)園」と書いた例の方が少ない。むしろ、右隣の「氏」の下に「一」を付加したり、右肩に「てん」を付加する字体の方が多数をしめるのである。

ここでは、立命館 ARC から得られる代表的な「祇園」の事例をしめす。(図6)

【10】祇園は誤字とはいえない

立命館 ARC のデジタル・アーカイブを資料として検証する限りにおいてであるが、京都の祇園の文字については、次のように整理できる。

- (1).現在の祇園で、「祇園」と書くことは、必ずしも誤字とはいえない。
- (2).江戸時代からの用例を通覧するならば、現在では正しいとされる「祇(氏)」の例はむしろ稀であって、「祇(一)」「祇(てん)」などの字体の方が、一般的な通行字体であったことが判明する。

少なくとも、以上の2点をふまえた上で、文字史研究の立場からは、次のような疑問があたりに発生する。ただし、本シンポジウムの主旨にてらして、問題点の指摘のみにとどめ、専門的な考察は別の機会に発表することとする。

今後は、次の2点が研究課題となる。

- (3).「祇(一)」や「祇(てん)」から、現在の「祇(氏)」が主流になったのは、いつごろ、どのような経緯によってなのか。



図6(ARCの祇園の実例)

- (4).さらに現在の祇園において見ることでできる「祇(示)」は、いつごろ、どのような経緯で使われるようになったのか。

【11】博多と広島祇園

福岡市(博多)と広島市の「祇園」地区の表記については、2006年11月2～4日にかけて、現地調査を行った。(注8)

その結果おおむね次のような事象が観察された。

- (1).博多の「祇園」は、博多総鎮守である櫛田神社が、素戔鳴尊をまつていることに発祥する。ここでは、博多祇園山笠など伝統的な祭礼行事が盛大におこなわれ、櫛田神社も地元の人々の信仰があつた。この点では、比較的、京都の八坂神社(=祇園社)を中心とした「祇園」に近い性格を持っている。
- (2).広島の「祇園」は、その地名の由来が祇園信仰によるとはいえ、現在では、八坂神社・祇園神社と名のる神社は存在しない(現在では、安神社)。また、大規模な祭礼行事もない。しかし、広島市郊外の住宅地として、地名として存在する。JR 下祇園駅・アストラムライン祇園新橋駅、小学校・中学校・法務局などの公共施設、地名表示など、多くの「祇園」の文字を目にすることができる。しかし、ここの「祇園」は、きわめて、辞書的規範に忠実である。「しめすへん」を「ネ」で書くか「示」で書くかの違いはあっても、右隣の「氏」が違反している例は、皆無に近い。(注9)

【12】デジタル・アーカイブ画像の価値と課題

ここで、本稿の次の主題にうつる。先に述べたような結論が得られたのは、まさにデジタル・アーカイブの存在によってであることは言うまでもない。従来であれば、図書館・博物館などの目録を検索して、逐一実物を見なければならなかった。また、浮世絵類は、保存のため貴重書あつかいであるため、その閲覧手続きにかなり労をついやさなければならなかった。しかし、デジタル・アーカイブの出現により、非常に研究が容易になったことは確かである。

しかし、ただ単にデジタル・アーカイブを礼賛

するのみ、というわけにはいかない。立命館 ARC のデジタル・アーカイブは、きわめてよく出来ている(研究者向け)ものであるが、一般的には、次のような課題があると思われるので、考えておきたい。

12-1. 可能な限り高精細画像が望ましい。

検索・一覧のためのサイズの小さいサムネイル画像は必要であるが、その一方で、書いてある文字が確実に判読できるだけの高精細画像の提供が必要である。デジタル・アーカイブは、単に画像データを見るだけのものではない。実物の保存のため、その閲覧の変わりを果たすべき役割をになっている。したがって、書物・文書類はもちろんであるが、絵画類であっても、中に文字の記載のあるものについては、それが十分に判読可能なレベルの画像が求められる。

したがって、一律に、画像のサイズ(ピクセル数)を決めてしまうのではなく、臨機応変に対処する方向があつてよい。部分的に細かな文字が記されているような画像については、その部分だけの拡大画像が、別に用意してあるのが望ましい。もちろん、絵画研究の立場からしても、描写の技法などの精査のためには、可能な限りの高精細画像が要求されることはいうまでもない。一般に絵画についての画像デジタル・アーカイブとされるものであっても、筆者のように、そこに「文字」を探す研究者もいる、その研究者の目的の多様性に対応できることが必要である、ということである。

12-2. 色彩の再現性についての配慮が必要

この論点については、筆者が、昨年の本シンポジウムで述べた。要約すれば、以下のようになる。

- (1).人間の目で見ることのできる色彩空間(xy 色度図)にくらべ、一般のデジタルカメラで撮影可能、あるいは、ディスプレイで表示可能な sRGB は、かなり狭い。また、印刷物で見る CMY(+K)の色彩の領域と、sRGB とは、一致しない(ガモット)。
- (2).少なくとも sRGB の領域に限っても、正しく再現するためには、精確な色彩見本が必要である。そのために利用可能なのは、一般に使用のコダック社製ではなく、マクベス・カラーチェッカーでなければならない。コダック社製のも

のは、sRGB 値が不明であり、かつ、使用の耐用期間が1ヵ月でしかない。コダック社製のものは、旧来のフィルム写真の時代のものであると認識しておくべきである。これに対して、マクベス社製のカラーチェッカーは、sRGB 値と、L*a*b*値が、厳密に規定されている。

- (3). そのように画像データ作成者側が配慮したとしても、実際のディスプレイの表示はまた異なる。ディスプレイの機能・設定によって色彩は違う。また、同じディスプレイで、同じ画像を見ても、通常の Windows 用画像閲覧ソフトで見ると、Photoshop で見るのとでは、明るさ(ガンマ値)が違っている。Photoshop で調整した画像を、一般の画像閲覧ソフトで見ると、暗く見える。

【13】 デジタル・アーカイブとメタデータ

今回、筆者が、対象としたのは、「祇園」という文字である。そのため、検索においては、江戸時代における現在の八坂神社(旧称は「祇園社」と、その祭礼行事である祇園祭にかんするものを探せばよい、という比較的容易な状況であった。したがって、検索のキーワードは、「八坂神社」と「祇園」が基本になる。

実際に立命館 ARC で検索した場合、「祇園」の傑作結果と、「八坂神社」の検索結果には、かなりの違いがある。

- (1). 「祇園」の方が、概念として広い。「祇園社」としての名称の他に、「祇園祭」とそれに関係するもろもろのデータが検索対象となる。
- (2). 「八坂神社」の場合、まさに八坂神社に限定されてしまう。
- (3). 「八坂神社」で検索した結果、表示されるのは、「祇園社」であり「八坂神社」の文字が見えないものもある。

おそらく、これは、検索のためのメタデータを付加した人間の判断の違い、ということによるのであろうと推測される。確かに、旧称は「祇園社」であり、現在の名称は「八坂神社」である。この場合、歴史的な資料としては、どちらの名称を選択すべきか、判断が分かれるのは、十分に納得できる事情ではある。

このような場合、次のような各種の対応が考えられる。

- (1). この種の学術的デジタル・アーカイブは、利用者が、ある程度の専門知識を持っていることを前提としておく。したがって、「祇園社＝八坂神社」であることを知っているものとして、両方を検索すればよいとして、その判断は利用者によだねる。かならずしも、オリジナル資料に忠実でなくても、かまわない。

- (2). あくまでもオリジナル資料の記載に忠実である。「祇園社」とあれば「祇園」で検索でき、「八坂神社」とあれば「八坂神社」で検索できるようにしておく。この方式の場合、「祇園社＝八坂神社」であることはかなり知られていることなのであまり問題は生じない。しかし、他の事例が対象の場合、これでは問題が生じる可能性がある。この場合、仮名書きの「ぎおん」をどうあつかうかなど問題が生じる。

- (3). 現在の通行の地域名称・施設名称と、オリジナル資料での記載とは、別扱いにする。この場合でも、現在の通行の名称として何を採用するか、また、オリジナル資料の記載から何を採用するか、かなり難しい判断を要求されることになる。今回の筆者の「祇園」研究での利用によっても、以上のような問題点が浮かび上がってくる。これには、さまざまに対応があり得る。ここで、筆者の研究目的(＝文字史・表記史の資料)という観点からは、次のように考える。

- (1). メタデータは、多目的に対応できること。たとえそれが、浮世絵であっても、あるいは、陶磁器であっても、その中に文字がある限り、文字研究の資料になる。文化財の安全な保管という意味でのデジタル・アーカイブ化を進行する以上、実物を手にとって見るに匹敵する、利用環境が求められる。

- (2). 検索キーワード(メタデータ)はあまり限定的に絞り込まないで、ある程度、おおざっぱな方が、かえって使いやすい。この点は、たぶん、理工系(情報学)と人文系の研究者の、発想の基本にかかわる点である。情報学系研究者であれば、あるキーワードに対するヒット率の向上が目的になる。したがって、なるべく細かくデータを区分する方向に向かう。しかし、人文学系研究者は、資料をしらみつぶしに自分の目で見つけて探す、という作業を、さほど苦にはしない。あるいは、むしろその過程で出会う種々の副産

物的な発見の方に、より興味があると言ってもよい。

画像データのメタデータのみならず、テキストデータについても、同様のことがいえる。言語研究において、「本を全部自分の目で読んで用例を探す」、これが従来の研究方法の基本である。コーパス言語研究が発達する一方で、逆に、テキストをきちんと読んで理解する、という基本がきわめて重要になってきている。

【14】 まとめ

(1). 祇園の表記の研究において、従来の文字研究に変わって、様々なデジタル化データが利用可能になった。それは、次の2点になる。

[1]. 非文献資料のデジタルカメラ画像の利用

[2]. 高品質の画像資料のデジタル・アーカイブの利用

(2). 今後、これらのデジタル化資料を有効に活用するためには、それぞれに次のような課題がある。

[1]. デジタルカメラ画像へのGPS情報の付加と利用方法。非文献資料にかぎらず、古文書などの文献資料や美術品・民俗資料の画像データの収集において、必須となる。特に、地方の旧家や寺院などに保管されている資料については、不可欠のメタデータとなる。

[2]. 画像資料デジタル・アーカイブのメタデータがどうあるべきか、についての、利用者(研究者側)からの考察が重要である。かりに、文字資料に限定しても、言語研究の立場からの文字史と、美術史・書道史研究の立場からでは、微妙に異なる。学際的な意見交流の場が必要である。

(3). メタデータの付加、場合によっては正誤の訂正などは、研究者の高度な学術的判断が要求される。その場合、ユーザ(多様な分野の専門研究者)の意見をコメントをなにかの方法で反映するシステムは必要であるが、ただそれを、例えばWikipedia方式で加えればよい、というものではない。そこには、アーカイブの作成・管理者の、各専門分野の研究者に対応するための、検証と選定の作業が、必要になってくる。

(4). 人文学系研究者にとっては、メタデータは、伝統的な学問の研究方法にも対応していることがのぞましい。例えば、書物(漢籍)であれば、東洋学における『四倉分類』などである。この点

にかんしては、人文学系研究者と理工系(情報学)研究者との間で、親密で率直な意見交換を基盤に、議論を積み重ねていくことが何よりも重要である。また、これしか方法はないと確信する。

【14】 謝辞

本稿をなすにあたっては、立命館大学アトリサーチセンターのデジタル・アーカイブ(公開)を利用させていただいた。また、博多・広島の祇園調査については、国立国語研究所(横山詔一・高田智和・米田純子の各氏)の協力と助言をいただいた。あつく御礼申し上げる次第である。

脚注

(注1) 参考文献 赤間(2005), pp.1-4

(注2) 参考文献 當山(2006a,b,c,2007)

(注3) 筆者が、昨年来おこなってきた、祇園調査の時点では、まだ、GPS情報の付加には、かなり技術的に難しい点が多くあった。しかし、本稿執筆時点では、デジタルカメラ用のGPS(ソニー社製、CS1K)が市販されている(2006年9月発売)。また、近い将来には、通常のデジタルカメラへのGPS機能搭載も一般化するものと予想される。なお、2007年度より、携帯電話(3G)におけるGPS機能搭載が義務づけられる方向である。

(注4) 『新字源』(改訂版)、小川環樹・西田太郎・赤塚忠(編)、角川書店、1994

(注5) 『増補改訂 JIS 漢字字典』、芝野耕司(編)、日本規格協会、2002

(注6) 一般に刊行されている書物・地図などでも「祇園」の事例は多い。その多くは、機械的な印刷によるものなので、ワープロによる〈誤変換〉とも考えられる。しかし、その中であって、おそらく確実にあえて「祇園」の表記をもちいたとおぼしき本がある。

柏木健一、『祇園は恋し』、文芸社、2004年、(※書名の「祇」の「しめすへん」は「ネ」)。

この本は、京都で学生時代(京都大学工学部)をすごした著者が、後年、功なり名をあげてのち、若いときにあこがれた祇園の芸舞妓との遊興が可能になって、その経験談を記したもの。通読すれば、相当に祇園に対する思い入れがあるこ

とが感じ取れる。このような著者が、その自分の本に「誤字」を使うであろうか？ 実は、この本こそが、筆者が、「祇園」は単なる誤字ではないのでは、と疑念を抱き始めたきっかけなのである。ただし、この本の本文では、通常の「祇園」が使用されている。

(注 7) <http://www.arc.ritsumei.ac.jp/db1/kyotomeisyo/index.htm>

京都名所絵・名所図絵／資料閲覧システム

(注 8) このうち、博多調査は、国立国語研究所との合同の調査であった。

(注 9) 広島事例については、次の理由によるものと考えられる。詳しくは、博多の調査結果とふくめて、別に、研究発表の機会を得て、述べることにしたい。(1).戦災で灰燼に帰して復興した広島という街の性格。(2).伝統的な祇園信仰が伝承されていないこと。

参考文献 HP

赤間亮(2005),「古典芸能研究におけるデジタルアーカイブの効用」,『第 11 回 公開シンポジウム 人文科学とデータベース』,(2005 年 12 月 3 日, 於大阪樟蔭女子大学)

笹原宏之(2006),『日本の漢字』(岩波新書), 岩波書店

當山日出夫(2005),「色彩のデジタル化の諸問題—日本文学作品画像データベースと色彩—」,『第 11 回 公開シンポジウム 人文科学とデータベース』,(2005 年 12 月 3 日, 於大阪樟蔭女子大学)

當山日出夫(2006a),「京都における「祇園」の表記の実態—非文献資料による文字史のこころみ—」,第 94 回訓点語学,(2006 年 5 月 12 日, 於東京学芸大学)

當山日出夫(2006b),「京都における「葛」と「祇」の使用事例と「JIS X 0213:2004」—非文献資料に基づく考察—」,『情報処理学会研究報告』(2006-CH-70)

當山日出夫(2006c),「地名用字の今むかし—京都の「祇園」の場合—」,『日本語学』(2006 年 12 月号), 明治書院

當山日出夫(2007),「京都の「祇園」の表記—「しめすへん」をどう書くか—」,『国語文字史の研究』(第 10 号), 和泉書院, (※入稿済み)

<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/> 立命館大学アートリサーチセンター

立命館 A R C 祇園表記調査							
	形態	整理番号	書体	ネ／氏	氏	点	名称(別名)
1	絵	UP1826	行	ネ	氏	なし	祇園／祇園表門大鳥居
2	絵	UP1828	行	ネ	一	なし	祇園／祇園街夕陽
3	絵	UP0701	行	ネ	氏	有	祇園
4	絵	UP1610	行	ネ	一	有	祇園
5	絵	UP0703	楷	ネ	氏	有	祇園
6	絵	UP0704	楷	ネ	氏	有	祇園
7	絵	UP0705	行	ネ	一	有	祇園
8	絵	UP0706	行	ネ	一	有	祇園
9	絵	UP0707	行	ネ	氏	有	祇園
10	絵	UP0708	行	ネ	氏	有	祇園
11	絵	UP0589	楷	ネ	一	有	祇園
12	絵	UP1739	楷	示?	一	なし	祇園
13	絵	UP2016	行	ネ	一	なし	祇園
15	絵	UP2542	楷／隸	示	?	なし	祇園
18	絵	UP2561	行	ネ	一	なし	祇園

19	絵	UP1827	行	ネ	氏	有	祇園／祇園御旅所
20	絵	UP2679	楷	ネ	一	有	祇園
32	絵	UP0702	楷	ネ	氏	有	祇園
33	絵	UP1670	楷	ネ	一	なし	祇園
34	絵	UP2562	楷	ネ	氏	なし	祇園／祇園社西門
35	絵	UP2237	行	ネ	一	なし	祇園
37	絵	arcBK01-0005	楷	ネ	一	なし	祇園
38	絵	arcBK02-0007	楷	ネ	氏	なし	祇園
39	絵	arcBK03-0014	楷	ネ	氏	なし	祇園
40	絵	arcBK04-0006	かな	△	△	△	祇園
41	絵	arcBK04-0020	かな	△	△	△	祇園
42	絵	arcBK07-0006	楷	ネ	氏	なし	祇園大鳥居二軒茶屋
43	絵	arcBK03-0018	行	ネ	一	なし	祇園桜園
44	絵	arcBK04-0006	かな	△	△	△	祇園町
45	絵	arcBK04-0021	行	ネ	氏	有	八坂神社／祇園社
46	絵	arcBK04-0022	楷	ネ	氏	なし	八坂神社／祇園社
47	絵	arcBK06-0008	かな	△	△	△	八坂神社／祇園社
48	絵(写真)	arcBK08-0044	楷	ネ	氏	なし	八坂神社／祇園社
49	絵	arcBK04-0021	行	ネ	氏	有	
50	絵文		行	ネ	氏	なし	祇園御旅所
51			行	ネ	氏	有	祇園女御の旧蹟
53	複絵文		楷	ネ	氏	なし	祇園祭／祇園会の祭式
54	複絵文		楷	ネ	氏	有	祇園削掛神事
55			楷	ネ	氏	有	祇園御神詠
56	複絵		楷	ネ	氏	なし	祇園祭
57			楷	ネ	氏	有	山王社(祇園)
58			楷	ネ	一	なし	祇園社
59	複絵		楷	ネ	氏	有	祇園神輿
60			行	ネ	氏	有	四条祇園橋

番号は、「祇園」での検索表示順に筆者(當山)が付加したもの。欠番は、「祇園」の文字が見いだせないもの。△は、仮名表記になっているもの。一つの文献に複数例の「祇園」の見いだせるものがあるが、この表では、検索してまず表示される画面のものに限定した。1～49は、ARC所蔵、50以降は、日文研所蔵。